

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

##### ●九州工業大学生命体工学研究科生体機能専攻

##### 「グローバル研究マインド強化教育プログラム」の事例

###### (具体的に何を実施したのか)

- ・採択された「国際マインド強化教育プログラム」内の「研究マインド強化プログラム」の実施に伴い、各研究室での受け入れ態勢を整え、専攻内に15のパッケージを作成し、学生の分野横断的研究が促進するようにした。また、専攻内にとどまらず海外の研究室にも派遣することで、国際感覚を身につけることを試みた。
- ・プログラム実施期間の3年間で専攻内8件、海外の大学・研究機関で4件の実績があった。

###### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・専攻内でのプログラム実施においては、ゼミナール時間や実験時間などが研究室ごとに異なっているため派遣時期などの調整を個別に行うなどの配慮をした。
- ・海外の大学で行う場合には事前に指導教員と派遣先教員とで打ち合わせを行いスムーズに研究体制が整うように配慮した。

###### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・研究マインド強化プログラムの受講生が行った口頭発表に対して試問したところ、受入先での研究内容の理解・課題遂行能力が認められた。自らの大学院での研究テーマに新たな設計・評価手法を習得した、自らの研究で設計したデバイスの応用範囲を拡大する上での助けになったなど、一定の研究マインド上昇成果が認められた。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### F. その他

#### ①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

##### ●九州工業大学生命体工学研究科生体機能専攻

##### 「グローバル研究マインド強化教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・「国際マインド強化プログラム」において、交流協定校を中心に短期間の海外派遣を実施した。学生は実践的な英語の使用を通じて、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の修得を図った。
- ・派遣先はオーストラリア、マレーシア、シンガポール、タイ、スリランカ、アメリカ等でありプログラム実施期間中に 18 名の実績を得た。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

海外派遣に際しては、事前に指導教員と受け入れ先教員とで十分協議し、短期間でもスムーズな実施を心掛けた。学生に対しては事前にカウンセリングを行うなど海外でのトラブルを未然に防ぐように気を付けた。通信手段としてノート PC を携帯させた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・派遣研究室での研究内容について口頭発表を行い、指導教員ならびに専攻教員が採点する方式の評価を行った。発表内容および質疑応答から、個人差はあるものの派遣前に比べて国際感覚の取得について一定の成果が認められた。さらに派遣前後の TOEIC スコアを比較したところ、平均してスコアの上昇が認められた。
- ・興味深い傾向として、書き取り能力には大きな変化がないのに対して、聞き取り能力の顕著な上昇が認められる。1 ヶ月間の滞在により、コミュニケーション（会話）に必要な聞き取り能力が向上したためと考えられる。